

with darkness /BKK

写真学科
小林 紀晴

with darkness /BKK

Department of Photography
KOBAYASHI Kisei

20代前半から主に東南アジアの都市を中心に撮影・制作を行い、30年ほどその変化を目にしてきた。そもそもは各国、地域の独自の文化(民族的・土着的)、習俗、生活スタイルなどに魅力を感じたからだ。ある時、共通した変化があることに気がついた。夜の景観である。フルカラーLEDの出現によるところが大きい。

その変化に注目し、2019年に中国(上海、重慶)で撮影を行った。あたかも映画『ブレードランナー』¹⁾の一場面のようであった。映画には37年後(2019年)のサイバーパンク的な架空のアジア都市が登場し、高層ビルの巨大な壁面にはフルカラーLEDさながらのライトアップが施されている(日本の芸者と思われる女性、文字の動画映像など)。

帰国後、さらに興味をもちリサーチをするなかで建築家・磯崎新²⁾の発言に出会った。「いま、中国でコンペをやる、都市の完成状態を夜景で描くように言われます。昼間は街の汚さが目立ちます、夜にライトアップすると幻想的な街に見える。(略)LEDでどれだけ街を装飾できるかが彼らにとっては大事なのですが、これはゴーストイメージに近い」³⁾

この発言に私は注目した。ほかのアジアの大都市にも共通していると感じたからだ。「ライトアップすると幻想的」という発言は「未来」への「期待」と「欲望」を強く感じさせる。

さらに人類学者マルク・オジェ⁴⁾の著書『非一場所』に触れた。現在の都市空間を「非一場所(スーパーモダニティ)」と名付け、多くの大都市を「匿名に満ちた均等な空間」と捉え、インターネット空間化、消費空間の大規模化、交通空間の高速化が進むことでバーチャル化していると指摘する。

私は上記の事柄から大きなヒントを得た。同じく他のアジアの大都市の変化にも当てはまると考えたからだ。一般的に市場経済原理は「自由競争」と「欲望」を満たすことで増幅するといわれているが、それらは最初に都市の表層、つまり建築物に現れやすいと仮説をたてた。

今回の作品は2023年8～9月にタイの首都バンコクで撮影を行った。夜のとばりが落ちる頃、「昼間」の現実が次第に希薄となる。やがて「幻想的」で「欲望」を内包した「匿名に満ちた均等な空間」が立ち現れる。

そのグラデーションのなかで感じたことは「いま、ここ」(特殊な場合を除き撮影者は現場に立ち、眼前の被写体を同時に記録することしかできない)についてだ。冒頭で述べた、独自の地域文化などへの魅力とは「いま、ここ」にしか存在しないものへの憧憬でもあった。そのかたちと意味が変化している予兆を感じた。一方で、私はこれを逆説的に新たな「独自のアジア的風景」とも捉えている。

1) 1982年公開のアメリカのSF映画。監督・リドリー・スコット/主演・ハリソン・フォード
近未来のビジョンを強烈にアピールして話題となる。

2) 磯崎新(1931—2022) 建築家 設計活動のかたわら建築批評を始め様々な領域で執筆・発言を行なう。

3) 対談「磯崎新Xホンマタカシ:時代を写す建築写真」『IMA』(vol.29,2019 Autumn,amana)

4) Marc Auge(1935—) フランスの人類学者 『非一場所』(訳・中川真知子 水声社 2017)のほか『権力およびイデオロギー理論』『同時代世界の人類学』などの著書がある。













